OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	歴史地理から見た蜀学の包容性
Author(s)	王, 小紅
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 34-49
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70144
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　果号（総六十三号）平成二十九年六月　三四―四九頁

〔特集〕

歴史地理から見た蜀学の包容性（＊）

王　小紅
（白井　順訳）

序

中国の文化的な地域意識の起源は早い。『礼記』王制に「広谷大川は制を異にし、民のその間に生くる者は俗を異にす」とある。『尚書』禹貢では九州に分け、各地の風土物産の区別を列挙しており、『詩経』国風では国別に詩歌を編纂している。両漢の時代、『史記』貨殖列伝、『漢書』地理志などでは、異なった地域の経済と風俗文化の相違に留意している。所謂地域は、ある土地の地理的な位置と環境を指し、その文化の発生と発展のための自然の基礎となっている。人類の文化は地理空間を舞台として一幕ずつ展開してゆくものであるから、地域の歴史地理の特徴と地域文化の性格的な特徴は非常に関係が深い。蜀学は学術文化の一流派として、歴史の発展中に全てのものを受け入れるという特徴を形成していったが、このことはそれらを育んだ四川盆地の独特な歴史地理環境と密接な関係を有している。

一、蜀学とその包容力

四川盆地は中国大陸の西南の一隅に位置し、山や川は麗しく、物産に富み民の暮らしは豊かで、いわゆる「地霊人傑」にして文化の燦然と輝く、長江上流の古代文明

の中心であり、中華文明の重要な起源の地の一つである。この地の独特な文化は「巴蜀文化」と称され、中原文化・斉魯文化・呉越文化・楚文化などの地域文化とともに古代から天下に鳴り響いている。巴蜀文化は博大にして精深であるが、その魂は蜀学である。「蜀学」の内実は広範であり、多種多様な意味を包含している(注1)。その内、最も広義の蜀学とは蜀中（主要な範囲は四川盆地）の一切の学術文化を指している。四川仁寿の人である元の大儒・虞集が敕を奉じて『経世大典』を纂修した時、元代では「蜀学微絶」(注2)になっていたことを非常に遺憾としていた。四川江安の人で民国時期の著名な蔵書家・傅増湘が「蜀学を顕彰」するために、わざわざ『宋代蜀文輯存』を纂輯した。夏君虞は『宋学概要』のなかでかく言う、「蜀学という以上、当然四川一省の学問を対象とする。……四川人が行なう学問は、すべてそれを蜀学と称す」(注3)と。彼らが言うところの「蜀学」は広く四川地域の学術文化を指しているが、本稿で検討する蜀学は、この広義での蜀学である。

蜀学は、いにしえにすでに存在していた。近代の国学大師・謝無量はかつて「蜀に学あり、中国に先んず」(注4)と言った。この観点は当時、時代に合っていないとされ、今日においてもすこぶる論難されるところであるが、しかしその「禹は『洛書』を受けて乃ち『洪範』を制す」、「道の大別は惟れ三宗、三宗の由りて興るは蜀を以てす」、すなわち、原始の道（峨嵋天真皇人の創成）、養生の道（峨嵋山に数百年隠れた彭祖の創成）、符咒の道（張道陵の創成、彼は蜀の人ではないが道を得て蜀に居り蜀で生涯を終えた）は、「国人数千年、崇戴して教宗と為すものは、惟れ儒、惟れ道、その実みな蜀人の創する所」の説を論証し、これらは民間の伝説であれ、文献の記載であれ、すべて根拠を探し出すことができるから、蜀学の淵源は遠古にはないとは言えない。宋人の説に従えば、「蜀に学あり、文公より始ま」(注5)るから、蜀学の発展もまたほとんど天下に甲たるところがあった。前漢の時期、巴蜀地域では中原の儒学を導入受容して文教事業を発展させ、「蜀学をして斉魯に比(なら)べし」め(注6)、更に「漢賦四家」のうち蜀がその三を占めた。両宋時期、三蘇父子を代表的な蜀学として、二程の「洛学」と王安石の「新学」と鼎立し、天下に議論を巻き起こし、「蜀学の盛、天下に冠たりて無窮に垂」れた。近代に至っては、蜀学はまた江浙・湖湘の学および西洋の学術などを融合して新生に成功し、湘学と並んで一時期を画した。

蜀学の発展史を大観すると、その主たる特徴は包容性

(compatibility) に求められる。劉咸炘は『蜀学論』のなかでこう述べている。「吾は蜀の南・北の間を介し、文・質の中を折（折衷）し、三方に抗して屹屹とし、独り気を鴻濛に完うす。」[注7]このことは現在、蜀学が単に思想内容において仏・老を雑揉し、百家を会通しただけでなく、さらに発展形式において以下のような重層的な包容性の体系を形成したことを意味している。一、四川盆地の内部における多種地域の文化的交流の包容。二、巴と蜀の両地における文化面での相互補完。三、蜀学と四川盆地外との各種の学術的文化的交流の成就。歴史地理の角度から、我々ははっきりとこのような内側から外側へと至る三つの大きな層を包容する体系として分析することができる。

二、歴史地理から見た蜀学の包容性

四川盆地は典型的な盆地の輪廓を具えており、四方が塞がれた「四塞」の土地（図1、2）になっている。盆地内部は川西平原、川中丘陵と川東平行嶺谷によって構成され、盆地の四方は高山峻嶺に取り囲まれている。西は青蔵高原と横断山脈に拠り、北は秦嶺・大巴山脈に近く、東は湘鄂の西の山地に接し、東南の周縁には大婁山が望まれ、南には雲貴高原が連なっている。同時に、その地は中国地形の三級階梯の第二級階梯上に位置し、また、中国大陸の南方と北方を分ける境界線である秦嶺の南坡に近接しているので、中国地理上の東と西、南と北との「過渡区」（transition region）になる。このほか、この地は青蔵高原の東側に位置し、盆地を取り囲む山々は南が低く北が高く、南は太平洋、大西洋に面してその温暖な気流が均しく盆地に届き、逆に北方の冷たい空気が長駆して直入しがたい地勢が造成されている。そのため、北緯二八－三二度の間に跨がっているとはいえ、地球上の同緯度のその他の地域が干熱少雨の気候なのとは異なって、中亜熱帯の季節風が吹く湿潤気候に属していて、年間降水量も豊富で、夏に酷暑がなく、冬に厳寒がない。岷江・沱江・涪江・嘉陵江・渠江の五つの河が南北方向に流れ、盆地の南縁を東西に横断する長江とともに「五＋一」の合流水系を構成し、また河流の沖積による堆積によって肥沃な土壌となり、豊富な動植物を養い育んできた。それゆえ四川盆地は良好な自然地理条件を具え、歴代の巴蜀地域の人々の経済活動、とりわけ文化創造のために良好な物質的基礎を提供したし、また盆地の内と外との多元文化融合のための条件を創出した。

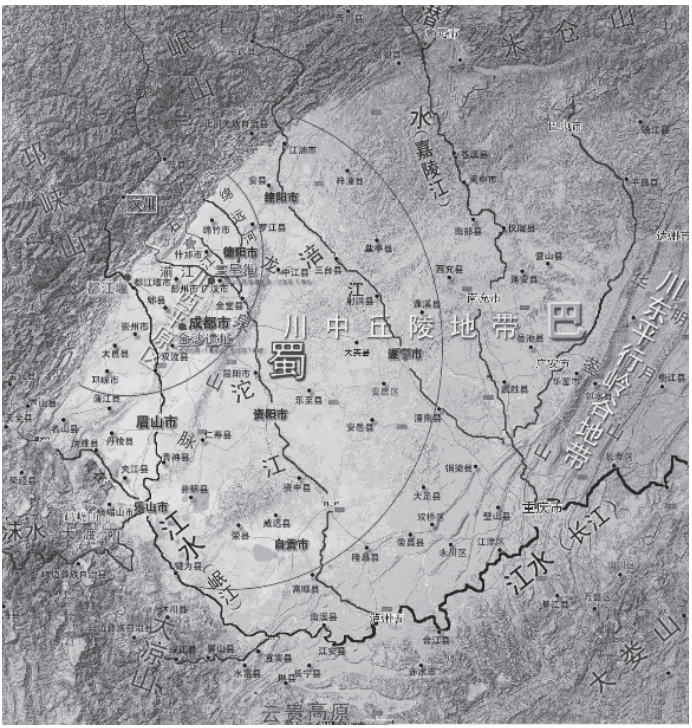


図1　四川盆地と蜀学の包容性圏層構造略図

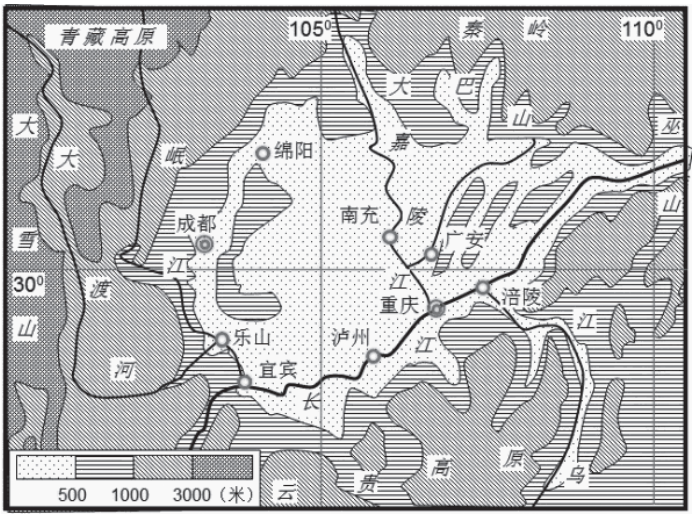


図2　四川盆地地形図

（一）盆地内部の多地域と文化の多元的融合

四川盆地の地理的な環境は複雑で、多種多様な地理区域を形成している。盆地内には低地があり、周辺には高低の異なる山々があるだけでなく、盆地の内部にも川西平原・川中丘陵・川東平行嶺谷の区別があり、盆地に多様な地形を具備させている。この異なった地形は、気候、土壌、動植物分布、ひいては人々の生産生活方式などに比較的大きな相違を賦与した。この影響を受けて、巴蜀文化は各種のサブカルチャー地域が併存する態勢を形成し、内部に多元的文化の特色を呈するに至った。

龍泉山と龍門山・邛崍山との間に位置する川西平原は、地表は平坦で面積も広大、都江堰の恵みを受けて「天府の土」となっている。ここは四民が居住し、商業の中心地であり、奢侈と文化が好まれ、博雅の儒者が多く、英奇の士も縦横に才を発揮するなど、人才が輩出し著名な書物も少なくない。

西は龍泉山に至り、東は華鎣山に止まり、北は大巴山麓から始まって南は長江以南に至るのが川中丘陵である。ここでは平地は二十里もないけれども、涪江が貫通していて水運と陸運が集まり、民は農業と蚕桑に励むので、「民は和し俗は阜（ゆたか）にして、鄒魯の風あり」と謳われる。

盆地の東部は、現代では川・渝（四川と重慶）が接するところで、北東から西南に走る三十余りの山脈によって形成された、最も地形の整ったところで、地理上では川東平行嶺谷と呼ばれている。ここは山と谷によって隔てられ、土は薄く民は貧しく、人々は鬼を信じているが、しかし士人は詩書に習熟して気風は勇健である。

盆地内部と周囲の山地は、文化的蘊蔵は少なく素朴ではあるが、「曲徑は幽處に通じ、禅房に花木深」き佳境であって、故に仏教・道教が発展する良好な環境になっている。「山は高きに在らず、仙有ればすなわち名あり」で、中国道教は淵源を川西平原の鶴鳴山に発し、青城山は中国四大道教の名山の一である。五斗米道が神明を祀った「二十四治」のうち二十二治は現在の四川省境内に分布しており、その多くは山中や山前に位置している。こうした山岳地帯には高道の士や道教徒が雲集したが、彼らは道を伝えただけでなく、書物を著し自己の思想を表明した。巴蜀の地は中国とインドとの文化交通上の要衝に位置し、仏教が早期に伝えられた地の一つとなっている。峨眉山は中国四大佛教名山の一つであり、仏教文化遺跡（仏像および仏教造像等を含む）も少なくなく、盆地内の交通の要衝である山崖や水際に散在している。

平原文化・丘陵文化・山地文化などの区別はあるけれども、しかしながら四川盆地は地理的には中心に向かう構造を呈している――地勢は四方の周縁にある山地から盆地の底部に向かって徐々に下降し、河流もまた非対称的に中心に向かう構造を呈しており、加えて地形が多様で、水系も数多い自然地理環境は、多元的文化の交流と移転のために空間的・交通的条件を提供した。とりわけ川西平原の優越した自然条件と比較的高い経済と文化の水準は、その地を盆地内の文化的中心にした。すなわち、各種文化は中心に向かって合流し融合し、中心文化はまた四方に放射されていった。この特徴は表現様式が非常に多様なので、一つ二つ例を挙げて説明を加える。

第一点：近数十年、続々と成都平原において発掘された古城址群は、上古の蜀人が山地から下り、四川盆地の内陸部に向かって移動し、最後に成都平原に定住したことを示している。このような移動はその後の歴史においてもずっと持続したので、盆地の中心的都市である成都の人口は長期にわたって高度に集中し、周囲の人口もたえず成都に向かって集中するようになった。その結果、唐代になると、成都に成都・華陽の両県を分置せざるを得なくなったが、これはまさしく、周辺文化が中心の文化地域に向かって凝集することの体現にほかならない。

第二点：道教の興起と伝播。道教は蜀中の山地に発祥したが、しかし平原地域に今文経学の気風が隆盛していたこと、黄老道術の流行が広範囲に渉っていたこと、そして山岳地帯において少数民族の神仙方術と巫術が盛行していたことと関わりがある(注8)。道教はまた蜀中の神仙伝説と神仙故事を吸収したが、これが道教の誕生と発展のための重要な要素となった。漢晋の時期、道教は成都の平原より出発して、金牛道に沿って東と北に向かって伝播し、まず巴郡に伝播し、そのあと再び北上して漢中地域に伝わった。

四川盆地の複雑な地形は多様な地域を作り出し、各々の地域は異なった時期に経済と文化が発展し、その水準も均一ではない。盆地独特の山川が中心に向かうように形成されていく構造は（盆地の地形および盆地内の河川が盆地の中心に向かって集中する）、川西平原を盆地文化の中心にし、また蜀学の淵藪の地とし、その他の地域の文化を吸引して続々とここに合流させることになった。同時にまた、この地の学術文化が盆地の中部や周辺の山岳地帯に放射されていった。蜀学はまさに、このように中心に向かって吸引される多様な文化の融合体であり、包容性の第一層はこうして形成されたのである。

（二）盆地の東西と巴蜀の融合

「巴蜀の由来は古く、殷周には已に伝えらる。」これは近代蜀中の偉大な学者・郭沫若が重慶市博物館での「巴蜀文物陳列」を参観した後に題した詩句である。確かに、甲骨文中にはすでに「蜀」字[注9]がある。歴史地理の角度から見て、巴と蜀はかつては二つの異なった民族・王国・地域で、その内実も族名→地名→国名→行政区画名→地名、という交錯する変化のプロセスを経ている。

「巴人」、「蜀人」、「巴国」、「蜀国」は、しばしば秦漢の文献に記載が見えるが、ここでは詳述しない。行政区画の設置について言うと、巴と蜀は時には分離、時には統合された。秦は巴郡と蜀郡を置き、漢では統一して益州とし、三国魏が蜀を滅ぼした後は益州を分けて益・梁の二州とした。唐の太宗は益州を剣南道、梁州を山南道に改め、唐の粛宗は剣南道を東西両川に分けたので、この時から「両川」の呼び名が始まった。唐の代宗はまた剣南東道・剣南西道・山南西道の三つの節度使を置き、そのためほかに「三川」の呼称もある。宋の初めには西川路と峡西路を置き、宋の真宗はまた西川路を分けて西川東路（また梓州路と称す）と西川西路（また益州路と称す）とし、峡西路を分けて利州路と夔州路とし、益・梓・利・夔の四路を形成し、それらを「川峡四路」と号して「四川」と略称したが、ここに「四川」の名が正式に作られた。元代には四川行省を設け、四川省と簡称した。明清以後は基本的にそれを踏襲した。もちろん、古代の巴蜀、唐代の両川、宋代の四川の管轄する地域は今日の四川・重慶の範囲に止まらず、さらに陝西漢中・甘粛文県・湖北恩施、そして雲南・貴州北部などの地域をも包括している。現在の巴蜀は主として地域名であり、中国西南部の四川盆地を核とする四川省と重慶市一帯を指している。大ざっぱに言えば、川東を巴と称し、川西を蜀と称するが、この二つの地域は大体涪江によって区切られている。提起しておく価値があるのは、唐代以後、川西ないし四川全体を、長期に渉って「蜀」あるいは「蜀中」をもって代称としていた事実である。清末時期、清王朝の四川統治が終了したあと、重慶で成立した新政権をやはり「蜀軍政府」と呼んだ。だから人々が四川盆地を称して蜀と呼ぶ時、往々にしてそのなかには巴も含まれている。したがって、一般的な意義上での「蜀学」にもまた、巴の地域の学術も含まれている。

巴と蜀とは、四川盆地というこの共通の地域に共存してきたが、「人皇に肇ま」った時には「囿を同じく」し[注10]、またともに『尚書』禹貢に言う「華陽、黒水は惟れ梁州」

の地に属していた。しかし、巴文化と蜀文化は早期には比較的大きな相違が存在していた。とはいえ両者は、長遠な歴史的時間のなかで絶えず融合してしだいに差異を縮め、内実が互いに一致する文化共同体となった。

早期の巴は、「其の民は質直好義、土風は敦厚」、「其れ古楽を好む」、「祭祀を善くす」、「巴師は勇鋭、歌舞して以て殷人を凌ぐ」[注11]などと言われた。一方、早期の蜀は、五大古蜀王の第五王開明の時に至って、蜀人はなお「椎髻、左言、文字を暁らず、未だ礼楽有らず」[注12]と評されている。しかし開明氏の後、「宗廟を立て、酒を以て曰に礼し、楽して曰に荊し、人は赤を尚び、帝は王と称す」ようにはなったが、この時の蜀地の文化は巴より遅れていたようである。

秦が巴蜀を滅ぼした後、「其の豪俠を蜀に徙」し、成都において「里閭を修整し、市には肆を張列」して[注13]、秦風によって大いに蜀を改造しようとした。蜀中には「斑絲文章多く」、「秦と分を同じくす、故に悍勇多し。詩に在りては、文王の化、江漢の域を被い、秦豳詠を同じくす、故に夏聲有るなり。」[注14]とりわけ前漢の蜀郡守・文翁は「民に読書法令を教」え[注15]、中原文化は次第に蜀地の主流文化の一つになり、蜀学は斉魯の学と名を斉しくする地方の学術となってゆき、前漢の四大辞賦家のうち蜀がその三を占めるという局面が出現した。同時に、蜀の影響を受け、「巴、漢も亦たこれに化」した[注16]。この時には、蜀は主流文化においては巴に優っていたようである。巴人は戦上手によって全国に名が轟き、渝水に居留する賓の民は「天性勁勇にして、初めて漢の前鋒たりて陥陣し、鋭気喜舞す」と讃えられ、涪陵郡（治は今の彭水南）は「人多く慓勇」、「蚕桑なく、文学を欠く」と言われた。故に常璩はこの時の巴蜀の違いを概括して「巴には将有り、蜀には相有り」[注17]としたのである。一方は武でもう一方は文であるから、巴と蜀は十分相互に補完すると言いうる。互いを補い合うというのは、両地の文化に巨大な交流と融合の空間が存在したことを意味している。したがって、蜀の文と巴の武という地域文化の特点は魏晋南北朝時期においてもずっと持続し続け、歴史書は晋代の蜀地について、「搢紳邵右の疇、比肩して進み、世よ其の美を載す」と述べ[注18]、巴地については「人多く勁勇にして、文学少なく、将帥の才有り」としている。しかし、巴の地は塾江以西、「土地は平敞にして、（人は）精敏にして軽疾」とし、涪陵や巴東郡は「上下俗を殊にし、情形不同」と述べて、蜀の文化が巴の地に影響を及ぼしていることを明示している。この種の影響は数百年後にも及んでおり、隋代の巴渝地

域の獠、狿、蠻、賨について、「其の居處風俗、衣服飲食、頗る僚に同じく、而して亦た蜀人と相類す」と述べられ、巴と蜀の差異が次第に縮小し、共通性が増大して行っていることが窺われる。

両宋時代は巴蜀文化の最盛期で、この時蜀地は「庠塾に聚学する者衆」く、「文学の士、彬彬として輩出す」と言われた(注19)。『宋史』は巴蜀人のために一五八人も伝を立てており、『四庫全書』中に存録されている宋代の四川人の文集は30余家に達し、それらはすべて蜀地に集中している。そのなかの中江の蘇舜卿、眉州の「三蘇」と王称、成都の范祖禹、井研の李心伝、丹棱の李燾など、すべて蜀学の代表的な人物である。巴の地にあっては、北宋時代の渝州（治は今の重慶）は蜀地と「風俗は一に同じ」とされた(注20)。もともと巴文化が最も発達した地域の一つは順慶府（治は今の南充）で、宋代には「儒風尤も盛んにして、人物間出す」(注21)と称された。

宋代の巴蜀同風は、士人の学術交遊からも証明しうる。北宋初期、張詠等が治蜀の官を歴任して学を興し士を推挙した結果、巴蜀の大地では読書して仕官を求めることが鬱然たる風となった。北宋の中期に至って、巴蜀地域は大量の文人・学者を輩出し、彼らの相互に学習し交遊するグループはたえず拡大し、華陽の范氏、眉山の蘇氏、梓州の文同、成都の呂陶を核心とする学者の交遊グループ出現し、地域としては、蜀地（宋代では多くの場合西川と呼ばれた）に主に集中した。両宋の際、涪陵（今の重慶涪陵）の人・譙定は、初め『易』を南平（今の重慶南川）の人・郭曩氏に学んだ。この郭曩氏は、「世よ南平に家し、始祖は漢に在りて厳君平の師となり、世よ易学を伝」えた家柄の人で、このことは蜀人が巴地（宋代では多くの場合東川と呼ばれた）に移住し、蜀学が巴に融合していたことを表している。譙定はそのあと程頤に学び、理学の「涪陵学派」を創った。図3に示した譙定学術源流図を見れば、彼の学術交遊圏は、巴の出身者（東川人）を主にはしているが、同時に張浚・張行成・呂凝之などの蜀（西川人）の出身者も居ることがわかる。そして張浚の学術交游圏もまた、蜀と巴の両地域を跨いでいる。

宋代以後今日に至るまで、巴と蜀は、人材の類型や数量の方面に若干の違いがある他は、両地の習俗はすでに互いにほとんど差がなく、学術文化は更に同一化している。まさに「関は巫山峡より起こり、巴蜀は是れ一家」となった。したがって、四川盆地は盆地の東側の巴は武を好み、盆地の西側の蜀は文を好むという伝統があるものの、両者は互いに補完しあっている。巴蜀の学者は交

遊を通して相互に学習し、長短を補い合い、両地と周囲の文化が相互に浸透・融合して、蜀学の包容性の第二層を形成している。

（三）盆地の内外文化の合流と融合

四川盆地の封鎖的な地形は、客観的には対外交流上の不便さの原因になっていた。だから李白は「蜀道の難は、青天に上がるより難し」という詠嘆を漏らしたのである。しかしながら、まさにこのことによって、巴蜀の先住者たちは対外交流に勇敢に立ち向かい、自己の環境を改善しようと努力した。四川盆地の外に目を転じると、盆地の北の境界と連続する秦嶺山脈は、中国大陸を南北に地理的に分界する境界線――亜熱帯季節風地域と温帯季節風地域の境界線であり、かつまた湿潤と半湿潤の境界線であり、長江流域と黄河流域の主要な分水嶺――になっている。秦嶺以北の陝西・甘粛地域においては寒冷乾燥、四川盆地以南の雲南・貴州地域は温暖湿潤、ゆえに四川盆地は封鎖的であると同時に、一つの合流處であり「過渡区」（transition region）なのである。四川盆地はまた、西高東低の中国地形において三級階梯状の第二級階梯上に位置している（図3参照）。盆地の西側は、第一級階梯上にある川西高原に面していて、そ

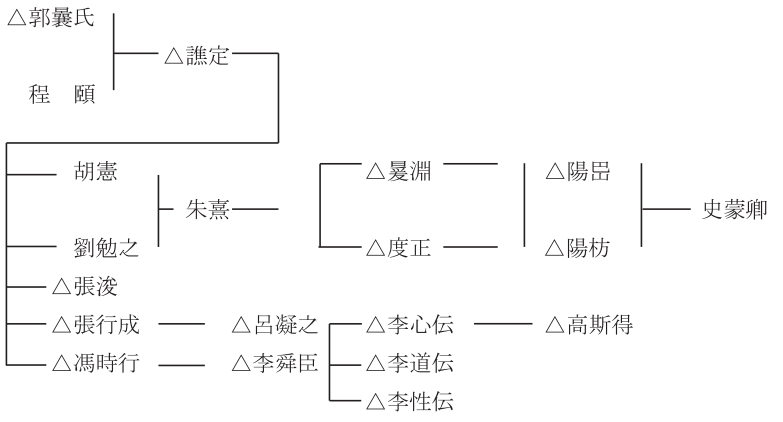
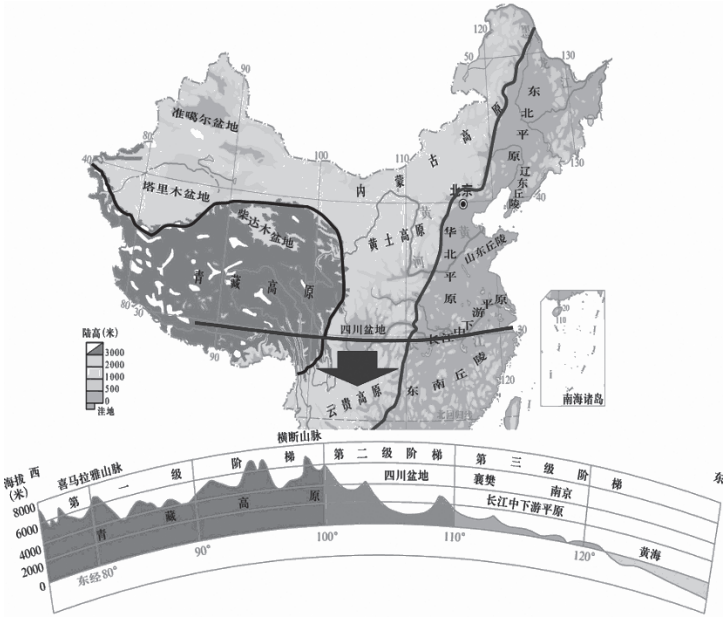


図３　譙定学術源流図

注：本表は鄒重華『士人学術交游圏：一個学術史研究的另類視角』による（注22）。△印の者は巴蜀の学者。

図4　南北東西過渡合流の地に位置する四川盆地



こでは遊牧が主な生産方式となっている。東側は第三階梯上の江漢平原に面していて、そこでは農耕を主な生産方式としている。このため両地域の間に位置する四川盆地は、古代より高原の狩猟・遊牧民族と平原の農耕民族とが会合するところで、農耕文化と遊牧文化との両者を兼ね具えることになった。

　四川盆地はこのような「過渡」と合流のところに位置しているが、そのことは気候や生物などの自然条件方面に体現されているだけでなく、また物産・風俗・文化諸方面においても体現されている。まさに宋の羅泌が言うように、ここは「西番（蕃）東漢、北秦南広」の地なのである(注23)。考古上の発見と歴史文献上の記載が示しているように、我が国の南北の二大古代文明地域、すなわち黄河流域と長江流域との間に位置する四川盆地は、非常に早くから中原および近隣地域、ひいては東南アジア文化と対話と交流があった。たとえば旧石器時代、盆地西部の富林文化は華北の小石器文化と関係があり、盆地中部の銅梁文化は貴州の観音洞文化と継承関係にある。三星堆で出土した玉器・青銅器・礼儀制度等は、独自性を具えてはいるが、中原文化の影響を体現している。南方シルクロード上の諸青銅文化は、また逆に多くの三星堆文化の要素を包含している。歴史上、「荊人の鱉霊死

し、尸は西土に化し、後に蜀帝となる」と言われるように[注24]、荊楚文化は巴蜀文化と出会っていた。武王が紂を伐った時、「庸、蜀、羌、髳、微、盧、彭、濮人」が従ったという[注25]。「石牛便金」、「五丁開道」という語が示しているように[注26]、巴蜀文化は秦隴文化と交流していた。漢代の文翁が学校を興して蜀を教化した際、張叔等十余人の郡県の官吏を京師に派遣し、博士に受業させた。学問を成就して成都に戻ってきた彼らは人材として採用され、ある人は官僚となり、ある人は教師となった。文翁のこの行ないは、中原文化を導入し、それを継承して巴蜀の伝統文化を顕彰することを通して、巴蜀の学術的な地位を高めて「蜀学は斉魯に比ぶ」ところまで押し上げることに成功した。これよりあと、地理上の「過渡区」と文化上の合流地域に位置する蜀学は、長期間にわたって南来北往と東進西出の文化を受容し、あわせてまた、自己自身とも会通融合し、次第に南北を受け入れ東西を蓄蔵する特色ある包容性を形成していった。

蜀学は多元文化を包含しているが、これは一方で移民を四川に入植させることで実現したものであり、もう一方で、巴蜀の学者が主体的に四川以外の地域の学者・学派と交流して実現した結果であった。

先秦時期の移民が四川盆地に入ってきたいきさつについてはすでに考証し難くなっているが、しかし秦漢以来、比較的大規模な移民がすでに十数回に達しているという文献の記載を見い出すことができる。たとえば秦の商鞅の師、先秦諸子百家の一人である尸佼は、難を避けて蜀に入り、『尸子』一書を著したが、本書は蜀学の黎明期の力作と言うべきである。秦の恵文王と始皇は六国の豪俠を蜀に遷し、嫪毐や呂不韋の舎人などの秦の有罪人を蜀に流謫した。また淮南王などのような漢の罪人も蜀に入っている。彼らは中原文化を将来し、蜀学が主流となるのを加速した。後漢末年三国の時、先ず劉焉・劉璋が荊州人士を率いて蜀に入り、後には劉備、諸葛亮の軍政が集団で入蜀した。また西北の略陽、天水六郡の十万余の流民および南方の僚人が次々に入蜀した。唐宋時期には、玄宗は「安史の乱」、僖宗は「黄巣の乱」のために入蜀した際、多くの文人や画家を連れて来た。五代には、中原から移ってきた花間派詩人の韋荘、画家の孫位などがいる。このように大量の各地の移民が入川したことは、必ず多地域と多元文化の融合をもたらしたはずである。宋末以後、元明清を経て、「湖広、四川を填む」の大移民は、疑いもなく文化の大合流であり大融合であった。近代の抗日戦争時期、四川は大後方となり、重慶は後期においてまた陪都となった。そのため、百万規

模の全国各省の人士がどっと四川に入り、数十の大学と文化機関がここに避難してきて、移民入川について引き続いて持続的に書かれるところとなった。歴代の各種の移民と多様な人材は、さまざまな思想文化を携えて入蜀したが、これは百川の合流にも比せられ、本土文化との相互交流は、巴蜀文化をして豊富多彩にして生機勃勃たる局面を現出させることになった。

蜀学は外来文化を摂取すると同時に、またその他の文化と主体的に対話し、博く衆家の長所を採って発展してきた。たとえば「西羌に興」った大禹は、山に沿い川を浚えて九州を定め、巴蜀文化を中原や東部の呉越地域に伝播した。司馬相如は、梁孝王の門客である斉人の鄒陽、淮陰の枚乗、呉荘忌等に会って喜び、「子虚賦」を著した(注27)。その代表作である「子虚賦」は、まさにこれら文壇の朋友との交遊の産物であったことが分かる。李白は「五歳で六甲を誦し、十歳で百家を観」(注28)、そして「十五で奇書を観」たから(注29)、百家の思想を織り交ぜ、豪放不羈の性格と詩風を具えることができた。二十五歳以後、彼は「剣を仗(お)びて国を去り、親に辞して遠遊す」と述べるように(注30)、天下を漫遊して各地の多様な文化を学んで、蜀学の光を輝かせた。

北宋中期には、蜀中の学者として范鎮、三蘇、呂陶、文同、宇文之邵、鮮於侁などが現れ、彼らは中央や各地に赴いて官吏となった。また、外地の少なからざる学者もまた蜀にやってきて任官した。巴蜀学者はこれ以来、欧陽修、司馬光、文彦博、趙抃、王安石、周敦頤、孫復、黄庭堅などの著名な学者と学術交流の関係を築いた。こうして蜀中の学術は全国に影響を及ぼし始め、宋代蜀学はここから始まって世に知られるに至った。蜀学はのちにさらに洛学、新学、関学、閩学、湘学などの地方学派と互いに論争し合い、また互いに吸収し刺激し合って、創造し発展していった。とりわけ三蘇を代表とする蘇氏蜀学は、「〈百家を融通〉すること重視し、勉めて〈三教を会通〉することを求め、歴史文化を集大成し、百科全書の気風があった」と評されている(注31)。そういうわけで、宋代は蜀学発展が極盛にまで達した時期であった。

宋末元初、多くの巴蜀学者が東南地域に寄寓し、浙東史学に対して重要な影響を及ぼし、東南の学術文化の発展を促進した。清代の成都では尊経書院が創立され、湖南学者・王闓運が山長に任ぜられて人々を育成し、多くの卓越した功績を残した蜀学の人才を輩出した。例えば、廖平、宋育仁、楊鋭などは、湖湘の学と西学が蜀学に与えた影響を顕著に示している。

ここから分かるように、四川盆地は四方が塞がれた地ではあるけれども、東西と南北が合流する地理的な「過渡区」に位置するので、周辺文化の影響を受けやすく、故に文化の合流地域となった。歴史上の十数回の移民、とりわけ北方の先進文化地域の移民の四川流入は、中原文化およびその他の多元文化をもたらし、蜀人が盆地の外に向かって吸収した文化と混然と一体化し、蜀学をして百家に会通して発展せしめ、その包容性の第三層を形成した。

最後に、上述したところをまとめておこう。蜀学は内から外へ三層の包容体系を具えているが、これは蜀学がその歴史地理によって形成された構造であり、また人・地関係論の巴蜀文化領域での体現でもある。四川盆地の独特な地理的位置と地理的条件は、その特殊な自然生態環境を決定し、そしてその特殊な自然生態環境はまた、個性が鮮明で歴史の悠遠な巴蜀文化を作り上げ、開放的で包容的な性格を養成した。巴蜀文化の核心としての蜀学は、とてつもなく長い歴史の時間のなかで、百川を受け入れる海のような姿勢と各種の文化との交流融合によって、次第に東西南北と古今中外の多文化が合流する多層で多次元の大いなる包容性を具えた学術流派へと変容を遂げたのである。

注

（＊）本文は国家社科基金重大項目〝巴蜀全書〟（10@ZH005）、四川省重大文化工程『巴蜀全書』（川宣［二〇一二］一一〇号）の段階的成果の一つに関連する。

（1）胡昭曦「蜀学与蜀学研究権議」、『天府新論』二〇〇四年第三期。

（2）（元）虞集「送趙茂元歸郷序」、『道園学古録』巻六、文淵閣『四庫全書』本。

（3）夏君虞『宋学概要』、商務印書館、一九三七年。

（4）謝無量『蜀学会敘』、民国間油印本、中国国家図書館蔵。

（5）（宋）家安国『範文正公祠堂記』、宋扈仲榮等編『成都文類』巻三四に所収、文淵閣『四庫全書』本。

（6）（晋）常璩『華陽国志・蜀志』、劉琳『華陽国志新校注』、四川大学出版社、二〇一五年。

（7）劉咸炘『推十文』巻一『蜀学論』・『推十書増補全本』（戊輯）、上海科学技術文献出版社、二〇〇九年。

（8）卿希泰「道教在巴蜀的初探」（上）、『社会科学研究』二〇〇四年第五期。

（9）董其祥「甲骨文中的巴与蜀」、『西南師範大学学報』（人文社会科学版）一九八〇年第三期。段渝『四川通史』第一冊第五

章第二節「巴方史跡」、四川大学出版社、一九九七年。甲骨文の中に〝巴〟字があったのかについて、学界の見方は一つではなく、前述の二人の学者は肯定的な態度を持つが、しかし陳夢家『殷墟卜辞綜述』、島邦男『殷墟卜辞綜類』、李孝定『甲骨文字集釋』、徐中舒『甲骨文字典』と『漢語大字典』等の学術界において高い学術的権威があるいくつかの古文字学の大著では、すべて甲骨文の中に巴字があるということを認めていない。

(10)（晋）常璩『華陽国志』蜀志。

(11)（晋）常璩『華陽国志』巴志。

(12)（舊題漢）揚雄「蜀王本紀」、（梁）蕭統編、（唐）李善註『文選』巻三「蜀都賦」。『蜀王本紀』が記す古蜀開明の時に〝文字を暁らず〟の説について、東晋の常璩は『華陽国志』敘志のなかで質疑を呈している。近年来、考古学者と歴史学者は三星堆や成都十二橋商代木結構建築遺址等から出土した玉器・竹簡・蚌殻・蛤殻・亀殻・樹皮・牛甲骨・動物牙歯・陶器・銅器など文物表面上に大量に刻された符号についての研究を通して、古蜀は文字を持つ文化だと認めるもので、ひいては甲骨文よりも古く、もっと成熟していたという。この説は段渝「巴蜀古文字的兩系及其起源」（『成都文物』一九九一年第三期）、馮広宏「巴蜀文字的期待」（一）～（十）、『文史雑誌』二〇〇四年第一期～二〇〇五年第四期を参照。

(13)（晋）常璩『華陽国志』蜀志。

(14)（晋）常璩『華陽国志』蜀志。

(15)（漢）班固『漢書』地理志、中華書局、一九六二年。

(16)（晋）常璩『華陽国志』先賢士女総贊。

(17)（晋）常璩『華陽国志』巴志。

(18)（晋）常璩『華陽国志』蜀志。

(19)（元）脱脱等『宋史』地理志、中華書局、一九八五年。

(20)（宋）楽史撰、王文楚校注『太平寰宇記』巻一三六、中華書局、二〇〇七年。

(21)（明）李賢等『大明一統志』順慶府引宋郡県志、三秦出版社、一九九〇年。

(22)鄒重華・粟品孝主編『宋代四川家族与学術論集』、四川大学出版社、二〇〇五年。

(23)（宋）羅泌『蜀山氏紀論』、文淵閣『四庫全書』本。

(24)（晋）常璩『華陽国志』序志。

(25)『尚書』牧誓。

(26)（北魏）酈道元『水経注』引来敏「本蜀論」、陳橋驛『水経注校證』、中華書局、二〇〇七年。

(27)（漢）司馬遷『史記』司馬相如列伝、中華書局、二〇一三年。

(28)（唐）李白『李太白文集』巻二五「上安州裴長史書」、上海古籍出版社、二〇一三年。

(29)（唐）李白『李太白文集』巻九「贈張相鎬」。

（30）（唐）李白『李太白文集』卷二五「上安州裴長史書」。
（31）彭華「博求〝三通〟蘇氏蜀学的形神与風骨」、『孔子研究』二〇一二年第四期。